



論文 パルテノン・フリーズ東面聖衣奉納場面に 関する小論

著者	長田 年弘
雑誌名	藝叢 : 筑波大学芸術学研究誌
巻	35
ページ	1-11
発行年	2020-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2241/00160050

パルテノン・フリーズ東面聖衣奉納場面に関する小論

長田 年弘

1. 問題の所在

パルテノン・フリーズ浮彫の主題に関する諸説においては、表現された様々な細部について複雑な議論が続けられている。全長 163 メートルに及ぶ各場面は、情報量が多いため論点が多岐にわたるが、概括すると四つの場面から成る。すなわち、様々な祭具を手に持ち、犠牲動物を導く徒歩行列、騎馬隊、アポバテス戦車競技、臨席する神々である。図像に加えて、後代の文献史料も、現実のアテナイの国家祭礼と行列の細部に関して少なからぬ情報を伝えている。本論文においては、そうした問題点のひとつとして東面 E35 の人物像の性別とその出自（社会的背景）について検討する。

パルテノン・フリーズ浮彫の主題は、1787 年の J. Stuart と N. Revett による提唱以来、アテナイにおいて 4 年に一度開催された大パナテナイア祭の行列を表しているとする解釈が最も一般的である。この見解は、民主政を完成に導いたペリクレス時代の神殿装飾として適切であり、また、M. Meyer および J.L. Shear が指摘するように、浮彫に表された具体的な二つの場面—アポバテスとペプロス—によって支持されるように思われる⁽¹⁾。

アポバテス競技は、戦車を用いた重装歩兵による競走で、フリーズ南北面は明らかにこの競技の場面を表している。走行中の戦車に歩兵が乗り降りするこの危険な競技は、前 5 世紀には、アテナイとポイオティアにおいてのみ行われていたことが判明している⁽²⁾。数ある国家祭礼の中でも、アポバテスは、大パナテナイア祭においてのみ挙行された。一方、フリーズ東面の中央には、5 人の人物が大きな布を扱う様子が描写され、一般に大パナテナイア祭における聖衣奉納の場面と見なされている（図 1）。定説に異論を唱える J.J. Pollitt でさえ、この場面に限っては、大パナテナイア祭の言及と解釈する⁽³⁾。すなわち、二つの場面は、現代人と同様に古代人にとっても、フリーズ全体を大パナテナイア祭を表したものと特定する手がかりとなっていたと思われる。

フリーズの主題解釈をめぐる学説の今日の傾向としては、たとえば大パナテナイア祭のように、あまり狭い範囲に限定せずに、ペリクレス時代のアテナイの宗教や文化の理想が generic に表現されているとする考え方も提唱され、一定の支持を得ている⁽⁴⁾。ただいづれにせよ、特定の祭礼を表すと見なす場合も、また様々な宗教文化を総合的に描写すると解する場合も、大多数の研究者は浮彫が全体として古代アテナイの現実の祭礼をいわば理想化して表現し

たと見なす点では一致している⁽⁵⁾。2000 年以降のフリーズ解釈に関しても、大まかな方向性に変化は見られない⁽⁶⁾。

こうした解釈を巡る研究史において、大きな波紋を投げかけたのは、J.B. Connelly による神話説であった⁽⁷⁾。一般に聖衣奉納の場面とされる東面中央は、彼女によれば、アテナイ王エレクトエウスの三人の娘たちの自己犠牲の場面を描写しているという（図 1）。E34 はエレクトエウス王、E33 は王妃プラクシテア、E31、32 は王女の姉ふたり、E35 は末娘とされる。J.B. Connelly は、三人の娘には身長差が見られ、長女、次女、三女であることが造形によって示されているという。伝承によれば、アテナイが隣国エレウシスと交戦した折、王はデルフォイの神託に従って末娘を人身御供に捧げ、姉二人も末娘との約束を守り後を追ったとされる。長大な騎馬隊の場面は、J.B. Connelly によれば、戦時の軍隊を表現している。東面の衣は、女神アテナの聖衣ではなく末娘の死に装束とされる。

J.B. Connelly 説には反論も多い。中でも、祝祭の華やかな行列の情景や、名祖英雄および神々などの寛いだ会話の表現が人身御供という主題に一致しないとする意見は、重要と思われる⁽⁸⁾。ただし、そうした矛盾はさておいても、J.B. Connelly 説が無視できない大きな理由のひとつは、一般に、ギリシア本土における神殿装飾は全て神話を主題としていたという事実であろう。破風、メトプ、フリーズ、アクロテリオンなど、神殿装飾は、稀な例外を別にして神話人物を表すのが通例であった。さらに、フリーズ浮彫には、騎士と戦車の行進が表現された例は存在するが犠牲行列は図像として類例がない⁽⁹⁾。

筆者は、ほとんどの比較作例が神話を表していたから、パルテノン・フリーズもまた神話主題を表現していたはずだという J.B. Connelly 説の論拠は説得的と考える。一般に、美術が埋め込まれていた歴史的コンテクストを復元する材料としては、比較作例が最も重要であろう。しかし、フリーズに神話場面を想定し、E35 を少女と解する J.B. Connelly 説はある矛盾を抱えているように思われる。というのも、古代ギリシア浮彫における E35 の比較作例は、おそらく数百点が残存しているが、本論において詳述するようにそれらは全て少年を表していると思われるからである。J. Hurwit が記すように、もし E35 が少年であるなら、エレクトエウス説は崩壊せざるをえない⁽¹⁰⁾。

以下の考察は、E35 の性別の検討を目的としながらも、古代ギリシア美術における女性裸体表現と、古代ギリシア宗教における神の召使の儀式的役割の、二点をめぐるより一般的な課題に関しても言及する。

図 1: パルテノン・フリーズ E30-36 大英博物館

図 2: パルテノン・フリーズ N132-136 大英博物館

2. E35 の性別

ペプロス場面の男性 (E34) と女性 (E33) は、一般に、神官と女神官の表現と見なされている (図 1)。椅子を運ぶ二人の少女 (E31, E32) は、祭礼の特殊な役割アレフォロイ *arrephoroi* (聖秘物運び) と見なす研究者が多数を占める⁽¹¹⁾。神官と共に、奉納される聖衣を扱う E35 について、多くの学者は少年と見なしてきたが、1975 年に M. Robertson が解剖学的な観点から少女説を提唱し、J. Boardman が賛同した。今日では M. Dillon および J.B. Connelly が少女説を支持するが、多くは少年説に賛同する⁽¹²⁾。

性別を検討するために、以下に比較作例を列挙する。文献と美術作品における E35 の比較例は、三種類に分類する。すなわち、パルテノン・フリーズの騎士の侍童、奉納浮彫における少年の召使、そして、陶器面の儀式場面におけるヒマティオンを身につける少年と青年たちである。

まず第一に、類似例は、他の何よりもパルテノン・フリーズに見られる。フリーズ浮彫には、青年に仕える少年が E35 を別にして他に 3 名表されている。研究者はこれらを、墓碑などにもしばしば登場する、騎士の侍童つまり召使の表現と考える⁽¹³⁾。すなわち、騎士 N135 に仕える N136 (図

図 3: パルテノン・フリーズ W5-6 大英博物館

図 4: パルテノン・フリーズ W23-24 大英博物館

2)、W5 に仕える W6 (図 3)、そして W23 に仕える W24 ((図 4) である。前者 2 名は、裸体で表され、W24 も損傷を受ける前は裸体であったと思われる。N136 と W24 は、主人の N135 と W23 の衣装を肩に掛けている。これらの作例は、E35 が同様に、儀式の補助の役割を演じる少年を表していた可能性を示唆する。

次に、奉納浮彫について検討する。E35 を少年と見なす

図 5: Peisis 奉納浮彫 Brauron 考古学博物館 1152

ったが、一方、陶器画図像は消費者間に流布し、顕著な理想化と一般化の傾向が見られる⁽²⁰⁾。陶器画には、奉納浮彫に比較して、牛などのより高価な犠牲獣を費やす、豪華な祝祭の一般的な場面が描かれる。補助的な役割を務める、たとえば動物を導く少年ないし青年の図像にも、現実を示唆する描写的な要素が欠けているとされる⁽²¹⁾。陶器画の場合は、E35と同様の、片肩に衣装を掛ける少年ないし青年は、事実上、他の儀式参加者と見分けることができない。少年たちは、フリーズ浮彫と同様に、神官の役割を演ずる年長の男性と共にしばしば表される(図 6)⁽²²⁾。なお、年長の男性の補助を務める、より小柄な少年の類型も登場し、J. Neilsが指摘するように、この表現は召使を表していたと思われる⁽²³⁾。

このように、E35 に比較される、バルテノン・フリーズ、奉納浮彫、陶器画の三つの分野における作例から見て、E35 が女性を表している可能性は低いと思われる。この議論は、古代ギリシア美術における女性の裸体表現という、より一般的な問題に関わっている。

3. 古代ギリシア美術における女性の裸体表現

以下に述べるように、そもそも古代ギリシア美術一般において、市民身分の少女と女性は、E35 のように半裸体で表されたことはなかった⁽²⁴⁾。

最初に、儀式場面における着衣表現について。奉納浮彫において、崇拜者の少年少女は、原則として同性の成人と同様の衣装を身にまとう。すなわち、男性成人、男性の青年と少年はヒマティオンを着て、女性成人、女性の青年と少女はキトンとヒマティオンに身を包む⁽²⁵⁾。ただし、子供と青年は、衣を腕と身体により厳しく巻き付けており、特に少年は、成人男性のように、裸体の右胸を露出する着つけはしない⁽²⁶⁾。M. Edelmann と C.J. Lawton は、彼らの衣装に関しては特別な規則があり、こうした厳格な着つけは高い教養としつけを表現していたことを推測する⁽²⁷⁾。いずれにせよ、少女と成人女性が、E35 のように半裸体で表されることはない⁽²⁸⁾。少女が、外衣を省略してキトンのみを着る場合も見られるが、ごく少数である⁽²⁹⁾。

議論の範囲を、儀式場面以外に拡大させた場合も同様である⁽³⁰⁾。実際の生活においても、古代ギリシア社会には女性の裸体に関する厳しい禁忌が存在したことが推察される。女性は公的な場においては、踝すら露出することはなかったと思われる⁽³¹⁾。少なくとも、前5世紀中頃までの美術表現において、女性の裸体表現は、売春婦⁽³²⁾、暴行の場面⁽³³⁾、運動競技⁽³⁴⁾、舞踏⁽³⁵⁾、身づくろい⁽³⁶⁾、そしてごく少数の女性部屋の場面⁽³⁷⁾にしか表現されなかった。たとえば、

図 6: 鐘型クラテル ルーヴル美術館 CA 307 (G 496)

学者の多くは、神殿に所属する少年 (temple boy) を想定する。文献においては、エウリピデス『イオン』に言及されている、神殿に所属する少年の例がしばしば引用される⁽¹⁴⁾。ただし、その詳細や社会的身分については不明である。

一方、奉納浮彫の分野では、主に前4世紀の作例に犠牲獣を導く少年の類型が登場する(図5)⁽¹⁵⁾。この類型は、既にアルカイック期にも登場しているように思われる⁽¹⁶⁾。4世紀の定型的な浮彫における少年の類型は、明らかに召使を表しており、この奉納浮彫に現れる少年もまた、奉納者の家族ではなく神殿に所属していたと推測されている⁽¹⁷⁾。浮彫の少年の衣装は三種類に分類することができる⁽¹⁸⁾。すなわち、裸体、*peplos* ないし *exomis* を片肩に掛ける例⁽¹⁹⁾、そして、*exomis* を下半身に巻き付ける例である(図5)。浮彫においても陶器画においても、最後の例がおそらく最も数多い。

次に、第三の比較例として、アッティカ陶器画について検討する。Van Stratenが記すように、奉納浮彫は、特定の神域に建立され、特定の人物や家族を描写するのが通例であ

アイアスによるカッサンドラに対する暴力の場面において、王女の白い胸と腿の表現が被害を語る記号となりえたのはそのためである。腿と膝を露出するアマゾン族の短キトンもまた、この神話上の部族が異性装をしていたことを示す記号として機能した。つまり、もし E35 が少女を表していたのであれば、その半裸体の表現は、物語表現の記号としての意味を担っていたはずである。半裸体は、何かのテキストを語っていたと思われる。J.B. Connelly 説には、そうした特殊な意味付与の説明は欠けているように思われる⁽³⁸⁾。

4. ニューヨークの鳩の墓碑

E35 に関する議論において、少女説の論拠として繰り返し引用された唯一の比較例は、ニューヨークの鳩の墓碑である (図 7)⁽³⁹⁾。この墓碑の人物像は、髪型が示すように、確かに性別は女性であり、キトンを着用せずペプロスからはお尻がのぞいている⁽⁴⁰⁾。ただ、この作品を、古代ギリシア浮彫において、少女の背中と臀部の露出が表現されえた実例と見なすことは難しいと思われる。一般に、古代ギリシア美術においては、子供のアイデンティティを示す手段はしばしば裸体表現であったゆえ、このお尻の表現もまた、死者が少女というよりも子供であることを示していたと解する方が自然だろう。つまり、墓碑を刻んだ彫刻家は、半裸体によって子供の表現を意図していたのだろう。人物像の抱く二羽の鳩も、古代ギリシア美術において、子供を示唆する典型的なアトリビュートであった⁽⁴¹⁾。

E35 は、墓碑の人物像と比べると、プロポーションに示されているように、子供ではなくより年長の人物を表していたように思われる。頭部と身長比率は、墓碑は 1:5.1、すなわち 5.1 頭身で、対する E35 は 6.6 頭身 (図 1) である。フリーズ浮彫の他の三人の侍童は、N136 が 5.9 頭身 (図 2)、W6 が 7.3 頭身 (図 3)、W24 が 7.0 頭身でいずれも墓碑の子供より年長である (図 4)。Ch. Sourvinou-Inwood による、前 5 世紀の陶器画に登場する三歳児の子供は、一般に 4 頭身から 5 頭身で、規範的な大人の女性の比率は 7 から 8 頭身とされる⁽⁴²⁾。彼女も認めるように、年齢による比率の表現には「幅」があるが、そのことを考慮に入れても、ニューヨークの墓碑の人物は三歳児の比率と一致し、E35 は子供と成人の中間に位置している⁽⁴³⁾。

もう一点、これまでの研究史においては指摘されていないことがある。墓碑の人物が着用するペプロスは、非常に長く、裾を引きずる様子が表現されている。これは意図的な表現だろう。Lee は、この衣装の長さについて、子供がこの背丈まで成長してほしかったという両親の願いを表

図 7: 墓碑浮彫 ニューヨーク メトロポリタン美術館 27.45 (Fletcher Fund 1927)

しているとする⁽⁴⁴⁾。しかし、大きすぎる衣装は、いつの時代においてもどの文明においても、その子供がまだ幼いことを示す最も単純な方法ではないだろうか。つまり、長すぎる衣装は、おそらく子供の愛らしさの表現であり、お尻が見えるという表現も同様であったと思われる⁽⁴⁵⁾。もし墓碑の分野に比較例を探るのであれば、*chlamys* の着付けを含めて、Lokris 出土の墓碑の少年は I. Jenkins も記すように E35 によく似ているように思われる⁽⁴⁶⁾。

5. 神々への奉仕と性別

パルテノン・フリーズ E35 を少女と見なす説のひとつの根拠は、当該の儀式が、アテナ女神に対して捧げられたという点にある。つまり、神々への奉仕者は、受容者である神格と同性の者がふさわしいと見なされたためである⁽⁴⁷⁾。ただし、一般に、男神、女神に対して、それぞれ同性が神官を務める傾向は見られるが、特定の崇拜において全ての人員が神格と同性の者で占められたとは考えられない。美術作品には反証が多数存在する。

たとえば、ある黒像式陶器画のアテナ女神崇拜の場面に登場する *kanephoros* (籠持ち) は男性であり⁽⁴⁸⁾、高名なフェラーラの陶器画におけるアポロン崇拜の儀式では、同じ役割を少女が演じている⁽⁴⁹⁾。大英博物館のクラテルにおいては、一人の成人男性と一人の少年が儀式に参加する様子

が描かれ、女神アテナがその様子を見つめている⁽⁵⁰⁾。前4世紀に定型化が進んだ奉納浮彫においては、崇拜者の一団を先導し犠牲獣を牽く少年と一対をなすように、行列の後方に円筒形の籠 *kiste* を頭上を持つ女性の *kistephoros* がしばしば登場する(図5)⁽⁵¹⁾。女神ニュンフェに対して捧げられた *Pitsas* の奉納絵馬においても、犠牲獣を牽く少年が表されている。結局、アテナ女神に対する儀礼において、補助役の少年が参加していた可能性は十分にある。

6. 神の召使

以下では、人物像 E35 が、神殿に所属する少年を表していたのか、または儀式において召使の役割を演ずる市民身分の少年を表していたのかについて検討したい。既に述べたように、男性(E34)と女性(E33)は、一般に神官と女神官と見なされている(図1)。E35を三種類の作例と比較すると、E35は、奉納浮彫の類型的な召使の少年とは衣装が一致せず、むしろ衣装の点でもその役割においても、陶器画の儀式場面のより一般的な少年たちの表現と類似していることがわかる。

もし、大パナテナイア祭の聖衣奉納儀式において、*temple boy* が実際に補助的な役割を務めたと仮定すれば、E35は、この少年を一般化された理想化された類型によって表現したものを見なすだろう。フリーズ浮彫の騎馬隊には、三人の召使の少年たちが表されており、E35も同様に補助的な役割の少年を表現していたと思われる。

ただし、筆者には、M. Edelmann の想定する仮説もまた検討に値するように思われる。彼女は、E35について、神殿所属の少年の描写とは見なさず、国家祭礼において市民身分の少年が召使の役割を務める様子が描写されたと思なす⁽⁵²⁾。確かに、パナテナイア祭において、この召使の役割が存在したとする伝承は存在せず、また、*temple boy* が役割を演じたとする記録も存在しない⁽⁵³⁾。ただ、Eleusinia、Proerosia および Hephaisteia の祭礼においては、市民身分の青年 *epheboi* が犠牲式において重要な役割を演じたことが判明しているゆえ、侍童 E35 がアテナイ一般市民の役割の表現であった可能性はあるように思われる⁽⁵⁴⁾。

前450年頃、アテナイにおけるデメテルとペルセフォネへの奉納の際に、リュシストラテという人物が自身を遜って、召使(*πρόπολος*)と呼んでいる例が思い出されよう⁽⁵⁵⁾。

ただし、E35が現実の *temple boy* を理想化して表現していたのか、あるいは、召使の役割を演ずる一般のアテナイ市民の青年を表現していたのかは、証言が残らないゆえ結論を保留しなければならないだろう。

文献略号

古代文献の略号は、DNP III (1997) XXXVI-XLIV; Liddell – Scott – Jones XVI-XLV に基づく。文献略号は、ドイツ考古学研究所 Deutsches Archäologisches Institut の投稿規定に基づく。
(https://www.dainst.org/documents/10180/70593/03_Liste+abzuk%C3%BCrztender+Zeitschriften_quer.pdf/2646d351-8e5d-4e8b-8acd-54f3c272d3ff)

- Aleshire S. B. 1994: Towards a Definition of ›State Cult‹ for Ancient Athens. In: Hägg R. (ed.), *Ancient Greek Cult Practice from the Epigraphical Evidence. Proceedings of the Second International Seminar on Ancient Greek Cult. Organised by the Swedish Institute at Athens, 22–24 November 1991.* Stockholm, 9–16.
- Avramidou, A. 2015: Women Dedicators on the Athenian Acropolis and their Role in Family Festivals: The Evidence for Maternal Motives between 530–450 BCE, *Cahiers Mondes Anciens* 6, 2015.
<<https://journals.openedition.org/mondanciens/1365>> (23.08.2019)
- Barringer J. M. 2008: *Art, Myth and Ritual in Classical Greece.* Cambridge.
- Berger E. / Gisler-Huwiler M. 1996: *Der Parthenon in Basel. Dokumentation zum Fries.* Mainz.
- Boardman J. 1977: The Parthenon Frieze. Another View, in: Höckmann U. / Krug A. (eds.), *Festschrift für Frank Brommer.* Mainz, 39–49.
- Boardman J. 1984: The Parthenon Frieze. In: Berger E. (ed.), *Parthenon-Kongress Basel. Referate und Berichte 4 bis 8 April 1982.* Mainz, 210–215.
- Boardman J. 1988: Notes on the Parthenon Frieze. In: Schmidt M. (ed.), *Kanon. Festschrift Ernst Berger zum 60. Geburtstag am 26. Februar 1988 gewidmet.* Basel, 9–10.
- Boardman J. 1991: The Naked Truth. *OxJJA* 10, 119–121.
- Boardman J. 1999: A Closer Look. *RA*, 305–330.
- Boegehold A. L. 1996: Group and Single Competitions at the Panathenaia. In: Neils J. (ed.), *Worshipping Athena. Panathenaia and Parthenon. Wisconsin Studies in Classics.* Wisconsin, 95–105.
- Bonfante L. 1989: Nudity as a Costume in Classical Art. *AJA* 93, 543–570.
- Borbein A. H. 2016: Die Skulpturen des Parthenon. Wie vollzieht sich Stilentwicklung? *JdI* 131, 2016, 93–147.
- Borbein A. H. 2017: Luigi Beschi and the Secrets of the Parthenon. In: Romeo I. / De Tommaso G. (eds.), *Archeologia classica a Firenze. Atti della Giornata di Studi in memoria di Luigi Beschi.* Mousai 7. Pisa. 51–65.
- Brommer F. 1977: *Der Parthenonfries.* Mainz.
- Brouskari M. 1974: *The Acropolis Museum. A Descriptive Catalogue.* Athens.
- Borgers O. 2008: Religious Citizenship in Classical Athens. Men and

- Women in Religious Representations on Athenian Vase-painting. *BABesch* 83, 73–97.
- Bundrick S. B. 2014: Selling Sacrifice on Classical Athenian Vases. *Hesperia* 83, 653–708.
- Burkert W. 1985: *Greek Religion*. Cambridge, Ma. (Translation, J. Raffan).
- Carpenter T. H. 2007: Greek Religion and Art. In: Ogden D. (ed.), *A Companion to Greek Religion*. Malden, 398–420.
- Castriota D. 1992: Myth, Ethos, and Actuality. *Official Art in Fifth-Century B.C. Athens*. Madison.
- Clairmont C. 1989: Girl or Boy? Parthenon East Frieze 35. *AA*, 495–496.
- Clarke J. R. 2014: Sexuality and Visual Representation. In: Hubbard T. K. (ed.), *A Companion to Greek and Roman Sexualities*. Malden, 509–533.
- Cohen B. 1997: Divesting the Female Breast of Clothes in Classical Sculpture. In: Koloski-Ostrow A. O. / Lyons Cl. L. (eds.), *Naked Truth. Women, Sexuality, and Gender in Classical Art and Archaeology*. Oxon, 66–92.
- Comella A. 2002: I rilievi votivi greci di periodo arcaico e classico. *Diffusione, ideologia, committenza*. Bari.
- Connelly J. B. 1996: Parthenon and Parthenoi. A Mythological Interpretation of the Parthenon Frieze. *AJA* 97, 53–80.
- Connelly J. B. 2007: *Portrait of a Priestess. Women and Ritual in Ancient Greece*. Princeton.
- Connelly J. B. 2014: *The Parthenon Enigma. A Journey into Legend. A New Understanding of the West's Most Iconic Building and the People Who Made It*. New York.
- Day J. W. 2016: Servants of the goddess: Female religious agency in archaic and fifth-century Greek epigrams and dedications. In: Santin E. / Foschia L. (eds.), *L'épigramme dans tous ses états. épigraphiques, littéraires, historiques*. Lyon, 207–222.
- Deubner L. 1969: *Attische Feste*. 2nd edition. Hildesheim.
- Dillon M. 2002: *Girls and Women in Classical Greek Religion*. London.
- Edelmann M. 1999: Menschen auf griechischen Weihreliefs. *Quellen und Forschungen zur Antiken Welt* 33. Munich.
- Ellinghaus Ch. 2011: Die Parthenonskulpturen. Der Bauschmuck eines öffentlichen Monumentes der demokratischen Gesellschaft Athens zur Zeit des Perikles. *Techniken in der bildenden Kunst zur Tradierung von Aussagen. ANTIQUITATES. Archäologische Forschungsergebnisse* 52. Hamburg.
- Fehr B. 2011: *Becoming Good Democrats and Wives. Civic Education and Female Socialization on the Parthenon Frieze*. Zürich.
- Fisher N. 2014: Athletics and Sexuality. In: Hubbard T. K. (ed.), *A Companion to Greek and Roman Sexualities*. Malden, 244–264.
- Froning H. 1971: *Dithyrambos und Vasenmalerei in Athen*. Ochsensfurt-Hohestadt.
- Gebauer J. 2002: *Pompe und Thysia. Attische Tieropferdarstellungen auf schwarz- und rotfigurigen Vasen*. Münster.
- Grossman J. B. 2007: *Forever Young. An Investigation of the Depictions of Children on Classical Attic Funerary Monuments*. In: Cohen A. / Rutter B. (eds), *Constructions of Childhood in Ancient Greece and Italy*, *Hesperia Supplements* 41. Princeton, 309–322.
- Hamlinton R. 2009: *Basket Case. Altars, Animals and Baskets on Classical Attic Votive Reliefs*. In: Jensen J. T. / Hinge, G. / Schultz P. / Wickkiser B. (eds.), *Aspects of Ancient Greek Cult. Context, Ritual and Iconography*. Aarhus, 29–39.
- Harrison E. B. 1996: *The Web of History. A Conservative Reading of the Parthenon Frieze*. In: Neils J. (ed.), *Worshipping Athena. Panathenaia and Parthenon*. Wisconsin, 198–214.
- Hausmann U. 1960: *Griechische Weihreliefs*. Berlin.
- Hurwit J. 1999: *The Athenian Acropolis: History, Mythology, and Archaeology from the Neolithic Era to the Present*. Cambridge.
- Jenkins I. 1994: *The Parthenon Frieze*. London.
- Jeppesen K. 2007: *A Fresh Approach to the Problems of the Parthenon Frieze*. In: Jensen J. / Hallager E. (eds.), *Proceedings of the Danish Institute at Athens* 5. Aarhus, 101–172.
- Junker K. / Tauchert S. 2015: *Helenas Töchter. Frauen und Mode im frühen Griechenland*. Darmstadt.
- Kahil L. 1983: *Mythological Repertoire of Brauron*. In: Moon W. G. (ed.), *Ancient Greek Art and Iconography*. Wisconsin, 231–244.
- Kardara Ch. 1961: Γλαθκῶπις Ὁ Ἀρχαῖος Ναός και τὸ θέμα τῆς ζυφόρου τοῦ παρθενῶνος, *AE* 1961, 61–158.
- Karoglou K. 2010: *Attic Pinakes. Votive Images in Clay*. Oxford.
- Kontos I. 1967: *Artemis Brauronia*. *ADelt* 22, 156–206.
- Kurke K. 1999: *Pindar and the Prostitutes, or Reading Ancient "Pornography"*. In: Porter J. I. (ed.), *Constructions of the Classical Body*. Ann Arbor, 101–125.
- Kyle D. G. 1992: *The Panathenaic Games: Sacred and Civic Athletics*. In: Neils J. (ed.), *Goddess and Polis. The Panathenaic Festival in Ancient Athens*. Exhibition Catalogue Hanover, New Hampshire. Princeton, 77–102.
- Kyle D. G. 2014: *Greek Female Sport. Rites, Running, and Racing*. In: Christensen P. / Kyle D. G. (eds.), *A Companion to Sport and Spectacle in Greek and Roman Antiquity*. Oxford, 258–275.
- Larson J. 2007: *Ancient Greek Cults. A Guide*. London.
- Lawton C. L. 2007: *Children in Classical Attic Votive Reliefs*. In: Cohen A. / Rutter B. (eds), *Constructions of Childhood in Ancient Greece and Italy*. *Hesperia Supplements* 41. Princeton, 41–60.
- Lee M. M. 2015: *Body, Dress, and Identity in Ancient Greece*. Cambridge.
- Lissarrague, F. 1990: *The Sexual Life of Satyrs*. In: Halperin D. M. / Winkler J. J. / Zeitlin R. I. (eds.), *Before Sexuality. The Construction of Erotic Experience in the Ancient Greek World*. Princeton, 53–82.

- Mangold M. 2000: *Kassandra in Athen. Die Eroberung Trojas auf attischen Vasenbildern*. Berlin.
- Meyer M. 2017: *Athena, Göttin von Athen. Kult und Mythos auf der Akropolis bis in Klassische Zeit*. Wiener Forschungen zur Archäologie 16. Vienna.
- Mitropoulou E. 1977: *Corpus I. Attic Votive Reliefs of the 6th and 5th Centuries B.C.* Athens.
- Neils J. 1992: *The Panathenaia. An Introduction*. In: Neils J. (ed.), *Goddess and Polis. The Panathenaic Festival in Ancient Athens*. Exhibition Catalogue Hanover, New Hampshire. Princeton, 13–28.
- Neils J. 2001: *The Parthenon Frieze*. Cambridge.
- Neils J. 2003: *Children and Greek Religion*. In: Neils J. / Oakley J. H. (eds.), *Coming of Age in Ancient Greece: Images of Childhood from the Classical Past*. Hanover, 139–162.
- Neumann G. 1979: *Probleme des Griechischen Weihreliefs*. Tübingen.
- Osada T. 2016: *The Parthenon Frieze. Display of Piety and Privilege*. In: Osada T. (ed.), *The Parthenon Frieze. Ritual Communication between the Goddess and the Polis. Parthenon Project Japan 2011–2014*. Vienna, 11–30.
- Osada T. 2019: *Rethinking the Parthenon Frieze as a Votive List of Dedicator, Recipient and Beneficiary*, *Jdl* 134, 1–51.
- Osborne R. 1996: *Desiring Women on Athenian Pottery*. In: Kampen N. B. (ed.), *Sexuality in Ancient Art. Near East, Egypt, Greece, and Italy*. Cambridge, 65–80.
- Osborne R. 2011: *The History Written on the Classical Greek Body*. Cambridge.
- Papini M. 2014: *Fidia. L'uomo che scolpi gli dei*. Rome.
- Papini M. 2016: *Review of Osada T. (ed.), The Parthenon Frieze. The Ritual Communication between the Goddess and the Polis. Parthenon Project Japan 2011–2014 (Vienna 2016)*, *Histara. les comptes rendus. Histoire de l'art, histoire des représentations et archéologie*. 2016-11-22, <<http://histara.sorbonne.fr/cr.php?cr=2811>> (18.02.2017)
- Palagia O. 2008: *The Parthenon Frieze. Boy or Girl?* *AntK* 51, 3–7.
- Parke H. W. 1977: *Festivals of the Athenians*. London.
- Parker R. 1996: *Athenian Religion. A History*. Oxford.
- Parker R. 2005: *Polytheism and Society at Athens*. Oxford.
- Pollitt J. J. 1997: *The Meaning of the Parthenon Frieze*. In: Buitron-Olivier D. (ed.), *The Interpretation of Architectural Sculpture in Greece and Rome. Studies in the History of Art*. Baltimore, 51–65.
- Pollitt J. J. 2014: *Solving the Parthenon's Mystery*, *New Criterion*, March 32, 66–70.
- Polinskaya I. 2003: *Liminality as Metaphor. Initiation and the Frontiers of Ancient Athens*. In: Dodd D. / Faraone Chr. A. (eds.), *Initiation in Ancient Greek Rituals and Narratives. New Critical Perspectives*. London / New York, 85–106.
- Räuchle V. 2017: *Die Mütter Athens und Ihre Kinder. Verhaltens- und Gefühlsideale in klassischer Zeit*. Berlin.
- Ridgway B. S. 1970: *The Severe Style in Greek Sculpture*. Princeton.
- Robertson M. / Frantz A. 1975: *The Parthenon Frieze*. London.
- Roccos L. J. 1995: *The Kanephoros and Her Festival Mantle in Greek Art*, *AJA* 99, 641–666.
- Roccos L. J. 2000: *Back-Mantle and Peplos. The Special Costume of Greek Maidens in 4th-Century Funerary and Votive Reliefs*. *Hesperia* 69, 235–265.
- Rotroff S. 1977: *The Parthenon Frieze and the Sacrifice to Athena*. *AJA* 81, 379–382.
- Rühfel H. 1984: *Das Kind in der griechischen Kunst. Von der minoisch-mykenischen Zeit bis zum Hellenismus*. Mainz am Mein.
- Scanlon Th. F. 2002: *Eros and Greek Athletics*. Oxford.
- Schneider L. 2010: *Der Parthenonfries. Selbstbewußtsein und kollektive Identität*. In: Hölkeskamp K.-J. / Stein-Hölkeskamp E. (eds.), *Die griechische Welt. Erinnerungsorte der Antike*. München. 259–279.
- Shapiro H. A. 1998: *Autochthony and the Visual Arts in Fifth-Century Athens*. In: Boedeker, D. / Raaflaub K. A. (eds.), *Democracy, Empire, and the Arts in Fifth-Century Athens*. Cambridge, Ma., 127–151.
- Shear J. L. 2001, *Polis and Panathenaia. The History and Development of Athena's Festival*. (Ph.D. diss., Pennsylvania University).
- Shear Jr. T. L. 2016: *Trophies of Victory. Public Building in Periklean Athens*. Princeton.
- Simon E. 1988: *Festivals of Attica. An Archaeological Commentary*. Wisconsin.
- Sourvinou-Inwood Ch. 1988: *Studies in Girls' Transitions. Aspects of the Arkteia and Age Representation in Attic Iconography*. Athens.
- Sourvinou-Inwood Ch. 2011: *Athenian Myths and Festivals. Aglauros, Erechtheus, Plynteria, Panathenaia, Dionysia*. Oxford.
- Stansbury-O'Donnell M. D. 2014: *Desirability and Body*. In: Hubbard T. K. (ed.), *A Companion to Greek and Roman Sexualities*. Malden, 31–53.
- Stasinopoulou-Kakaroug E. 2008: no. 101. *Pinax (copy by Gilliéron)*. In: Kaltsas N. / Shapiro A. (eds.), *Worshipping Women. Ritual and Reality in Classical Athens*. New York, 225.
- Stewart A. 1990: *Greek Sculpture*. New Haven.
- Stewart A. 1995: *Rape?* In: Reeder E. D. (ed.), *Pandora's Box. Women in Classical Greece*. Princeton, 74–90.
- Stewart A. 1996: *Reflections*. In: Kampen N. B. (ed.), *Sexuality in Ancient Art. Near East, Egypt, Greece, and Italy*. Cambridge, 136–154.
- Stewart A. 1997: *Art, Desire and the Body in Ancient Greece*. Cambridge.
- Sutton Jr. R. F. 1992: *Pornography and Persuasion on Attic Pottery*. In: Richlin E. (ed.), *Pornography and Representation in Greece and Rome*. Oxford, 3–35.

- Van Straten F. T. 1995: *Hiera Kala. Images of Animal Sacrifice in Archaic and Classical Greece. Religions in the Graeco-Roman World* 127. Leiden.
- Van Straten F. T. 1987, *Greek Sacrificial Representations. Livestock Prices and Religious Mentality*. In: Linders T. / Nordquist G. (eds.), *Gifts to the Gods. Proceedings of the Uppsala Symposium 1985*. BoreasUpps 15. Uppsala, 159–170.
- Vikela, E. 1997: *Attische Weihreliefs und die Kult-Topographie Attikas*. AM 112, 167–246.
- Vikela, E. 2005: *Griechische Reliefweihungen an Athena. Ikonographie der Göttin und Bildkomposition der Reliefs*, AM 120, 85–161.
- Vikela E. 2015: *Apollon, Artemis, Leto: Eine Untersuchung zur Typologie, Ikonographie und Hermeneutik der drei Gottheiten auf griechischen Weihreliefs*. Athenaia 7. Munich.
- Vlassopoulou C. 2008: no. 113. *Cast of Slab V of the East Frieze of the Parthenon*. In: Kaltsas N. / Shapiro, A. (eds.), *Worshipping Women. Ritual and Reality in Classical Athens*. New York, 250f.
- Walter-Karydi E. 2015: *Die Athener und ihre Gräber. 1000-300 v. Chr*. Berlin.
- Wesenberg B. 1995: *Panathenäische Peplosdedikation und Arrephorie. Zur Thematik des Parthenonfrieses*, JdI 110, 1995, 149–178.
- Wesenberg B. 2014: *Parthenonische Peploshäresie (Ostfries 34-35)*. In: Graen D. – Rind M. / Wabersich H. (eds.), *Otium cum dignitate. Festschrift für Angelika Geyer zum 65. Geburtstag*. Studien zur Archäologie und Rezeptionsgeschichte der Antike. BAR International Series. Oxford, 65–81.
- Wesenberg B. 2016: *Von Mädchen und Stühlen. Parthenonfries 31-33*. In: Schwarzer H. / Nieswandt H.-H. (eds.), „Man kann es nicht prächtig genug vorstellen!“ *Festschrift für Dieter Salzmann zum 65. Geburtstag* 2. Marsberg. 397–426.
- Wrede H. 2008: *Das Lob der Demokratie am Parthenonfries*. Trierer Winkelmannsprogramm 21. Mainz.
- Younger J. G. 1997: *Gender and Sexuality in the Parthenon Frieze*. In: Koloski-Ostrow A. O. / Lyons Cl. L. (eds.), *Naked Truth. Women, Sexuality, and Gender in Classical Art and Archaeology*. Oxon, 120–153.
- 長田 年弘 2013a : 「記憶」と「敬虔」の径庭—アクロポリス奉納文化におけるバルテノン・フリーズ』『西洋美術研究』No. 17, 三元社, 29–49.
- 長田 年弘 2013b : 「バルテノン・フリーズ—贅美を尽くした捧げ物」『藝叢』28, 筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術学研究室, 2013, 1–10.
- 註
- (1) Shear 2001, 752, 756; Shear 2016, 124; Meyer 2017, 103.
- (2) Pollitt 1997, 58f.; Hurwit 1999, 226. Shear 2001, 300は、前5世紀末のOroposにおけるアポバテス競技の実施をポイオティアに関する史料と結びつけて解釈する。Harpokr. s. v. apobates. Kyle 1992, 89–91. esp. 89; Berger – Gisler-Huwiler 1996, 69; Neils 2001, 184, 238; Kyle 2014, 162を参照。パナテナイア祭の競技を含めた日程に関しては、前4世紀の銘文に基づいて復元が試みられている。IG II2 2311; Neils 1992, 15–17; Kyle 1992, 205, n. 69; Boegehold 1996, 96f. 銘文の復元については Shear 2001, 1162–1166.
- (3) Pollitt 1997. *バルテノン・フリーズの1999年までの先行研究における諸解釈*はHurwit 1999, 222–228, 232–234に簡潔に記されている。長田 2013a; 長田 2013b; Osada 2016; Osada 2019, n. 2, 4も参照。Hurwit 1999によれば、バルテノン・フリーズが大パナテナイア祭の行列を表現すると見なすこれまでの説は、mythological, historical, generic の三つに大別されるという。ただしHurwit自身は、これら三つの見解のいずれにも賛同せず、フリーズがパナテナイア祭だけでなくアテナイの宗教的な祭の要素を抽出したシノプシスを表現していたと見なす。フリーズが神話を表現すると見なす説 (Kardara 1961; Connelly 1996; Connelly 2014) は、第一パナテナイア祭の創設における行列が浮彫の主題であったとする。歴史説 (Boardman 1977) は、マラトンの戦いの直前の490年の大パナテナイア祭の行列を表現すると見なす。第三のgeneric説は、本文に記すとおり、特定の儀式ではなく儀式一般の理想化された表現と見なす。
- (4) こうした学説の傾斜において、重要な役割を果たしたのは Jenkins 1994; Wesenberg 1995; Pollitt 1997の仮説であったと思われる。
- (5) Brommer 1977, passim. Jenkins 1994, 42は、ペリクレスと同時代のパナテナイア祭の理想化された表現と見なす。詳細については長田 2013a, 30を参照。
- (6) 1990年代後半以降、多くの学説がフリーズ解釈について議論してきたが、その多くはWesenbergないしPollittの仮説と同様に、浮彫を都市国家アテナイの文化的なvalue-systemの体現と見なす。Hurwit 1999, 227; Neils 2001, esp. 196–201; Wrede 2008, esp. 22f.; Schneider 2010, esp. 277; Ellinghaus 2011; Fehr 2011; Papini 2014, 87–114; Shear 2016, 127, 132, 134; Wesenberg 2014; Wesenberg 2016を参照。その他Jeppesen 2007; Borbein 2016; Borbein 2017.反論としてOsada 2019を参照。
- (7) Connelly 1996; Connelly 2014.
- (8) Neils 2001, 178f. Connellyに対する反論はShapiro 1998, 145; Hurwit 1999, esp. 224; Shear 2001, 744, n. 275; Barringer 2008, 91; Parker 2005, 265, n. 52; Fehr 2011, 104, n. 421; Pollitt 2014.
- (9) Castriota 1992, 202–229.

- (10) Hurwit 1999, esp. 224
- (11) 多くの研究者が、E31, E32をアレフォロイ *arrephoroi* と解釈する。パナテナイア祭の行列において、椅子運びは在留外国人女性がその役割を務めたことが文献から知られているが、パルテノン・フリーズのこの場面については、東面中央という最も重要な箇所に表示されているためもあって、彼女たちを在留外国人女性の表現とする意見はほとんど見られない。Deubner 1969, 12; Parke 1977, 141–143; Brommer 1977, 266; Simon 1983, 39–43, 66–68; Jenkins 1994, 35–40, 79, esp. 35; Neils 2001, 168; Vlassopoulou 2008. Berger / Gisler-Huwiler 1996, 157–159 は、少女たちの年齢とE31の左手の持ち物について詳細に論じている。Shear 2001, 163; Larson 2007, 45f.; Sourvinou-Inwood 2011, 301f.; Papini 2014, 97–99; Papini 2016; Osada 2019, n. 117も参照。
- (12) E35に関する先行研究は右記を参照。Berger / Gisler-Huwiler 1996, 158f., 172–174; Connelly 2014, n. 73 on 402. 少女説の代表者は次のとおり。Boardman 1984; Boardman 1988; Boardman 1991; Boardman 1999; Robertson and Frantz 1975; Stewart 1990, 155, 157; Dillon 2002; Connelly 1996; Connelly 2014.
- (13) Harrison 1996, 203f.; Neils 2001, 169–171. Hurwit 1999, 223f.; Fehr 2011, 105f.
- (14) Brommer 1977, 269f.; Parke 1977, 143; Simon 1983, 66f.; Jenkins 1994, 35; Harrison 1996, 203; Neils 2001, 171.
- (15) ペイシスの奉納浮彫Brauron Museum 1152: Πεισις [...] ἰοῦτος γόνη ἀνέθηκεν Ἀρτεμίδι. Kontos 1967, 195, pl. 104b; Van Straten 1995, 81, R74, fig. 86; Vikela 1997, 226, n. 239; Edelmann 1999, 44f., F28, fig. 23; Comella 2002, Brauron 2; Vikela 2015, Tr 11, pl. 57; Osada 2019, n. 40, fig. 4; LIMC II (1984) 298, no. 957 s. v. Apollon (W. Lambrinudakis); LIMC II (1984) 708, no. 1127, pl. 536 s. v. Artemis (L. Kahil); ThesCRA I (2004) 11, no. 59 s. v. 1. Processions, Gr. (True M. / Daehner J. / Grossman J. B. / Lapatin K. D. S.). 同様の例として、アリストニケの奉納浮彫も参照。Brauron Museum 1151: Ἀρτεμίδι εὐξάμενη ἀνέθηκεν Ἀριστονίκη Ἀντιφάνους Θεοραΐδος γόνη. Kontos 1967, 195, pl. 104a; Van Straten 1995, 81, R73, fig. 57; Vikela 1997, 225f., n. 238; Edelmann 1999, F27, fig. 31; Comella 2002, Brauron 1, fig. 125; Vikela 2015, Ar 31, pl. 33; Osada 2019, n. 41; LIMC II (1984) 695f., no. 974 s. v. Artemis (L. Kahil); ThesCRA I (2004) 11, no. 57 s. v. 1. Processions, Gr. (M. True – J. Daehner – J. B. Grossman – K. D. S. Lapatin); ThesCRA III (2005) 181–192 s. v. 6.c. Veneration (A. Constantini).
- (16) (1) The wooden *pinakes* from Pitsas: Athens, National Museum 16464; Hausmann 1960, 15f., fig. 4; ThesCRA I (2004) 15f., no. 97 s. v. 1. Processions, Gr. (True M. / Daehner J. / Grossman J. B. / Lapatin K. D. S.); EAA VI (1965) 201–204 s. v. Pitsa, ill.; Van Straten 1995, 57f., fig. 56; Roccas 1995, 651f., fig. 8; Dillon 2002, 228, fig. 7, 3; Connelly 2007, 170f., fig. 6, 3; Stasinopoulou-Kakarouga 2008, 225, fig. 101; Karoglou 2010, 9, fig. 1; Osada 2019, n. 78, fig. 11. (2) The pig-relief: The Acropolis Museum 581: Brouskari 1974, 52f. fig. 94; Mitropoulou 1977, 26 no. 21 fig. 39; Neumann 1979, 34. 38. 70f. pl. 18a; Edelmann 1999, A14 fig. 4; Neils 2001, 42 fig. 33; Comella 2002, Atene 8 fig. 11; Vikela 2005, 93–95 pl. 12. 2; LIMC II (1984) 1011 no. 587 s. v. Athena (R. Fleischer); ThesCRA I (2004) no. 71 s. v. 1. Processions, Gr. (M. True – J. Daehner – J. B. Grossman – K. D. S. Lapatin); ThesCRA I (2004) no. 112 s. v. 2.a. Sacrifices, Gr. (A. Hermary – M. Leguilloux); ThesCRA III (2005) 188 no. 63 s. v. 6.c. Veneration (A. Constantini); Osada 2019, fig. 1.
- (17) Edelmann 1999, 144f.; Van Straten 1995, 60, 64; ThesCRA I (2004) 286 s. v. 2.d. Dedications, Gr. (E. Vikela).
- (18) 衣装についてはBundrick 2014, esp. 666も参照。
- (19) 註16(1)のほか、三点の例を挙げる。(1) Paris, Louvre Museum 755 (votive relief): Neumann 1979, 54, pl. 44b; Van Straten 1995, R23, fig. 63; LIMC II (1984) 873, no. 64, s. v. Asklepios (B. Holtzmann); ThesCRA I (2004) 76, no. 85 s. v. 2.a. Sacrifices, Gr. (A. Hermary / M. Leguilloux). (2) Paris, Louvre Museum 752 (votive relief): Van Straten 1995, R67, fig. 81. (3) Athens, National Museum 1334 (votive relief): LIMC II (1984) 887, no. 338 s. v. Asklepios (B. Holtzmann); Edelmann 1999, E3.
- (20) Van Straten 1987, 167; Van Straten 1995, 24, 60. 113f.; Bundrick 2014, esp. 668f. 陶器画における *kanephoros* についてはRoccas 1995; Gebauer 2002, 170f.; Hamlington 2009も参照。
- (21) たとえば、註 22(1)のポストンのbell-krater は、この原則に関する稀な例外と云う。登場人物に銘によって名前が付されているからである。
- (22) Paris, Louvre No. CA 307 (G 496): Van Straten 1995, 143f., 158, 231, V200, fig. 152; Gebauer 2002, 406f., B43, fig. 268; Osada 2019, n. 134(1) fig. 18; LIMC II (1984) 298, no. 954 s. v. Apollon (W. Lambrinudakis).その他に四作例を挙げる。(1) Boston Museum of Fine Art 95.25 (bell-krater): ARV2 1149/9; Van Straten 1995, V131, fig. 32; Gebauer 2002, 219–21, 248–251, 482, 498, 504, A4, fig. 114. (2) Würzburg 474 (kylix): ARV2 173/10; Van Straten 1995, V315, fig. 37. (3) Ferrara, Museo Nazionale 44894 (T 57 C VP) (bell-krater): ARV2 1143, 1; Van Straten 1995, 20f., V78, fig. 13; Gebauer 2002, 106–109, 174, 176, 184, 210, 478, 506, P58, figs. 57f.; LIMC II (1984) 220, no. 303 s. v. Apollon (W. Lambrinudakis); ThesCRA I (2004) no. 52 s. v. 1. Greek Processions, Gr. (M. True / J. Daehner / J. B. Grossman / K. D. S. Lapatin); Borgers 2008, 93, n. 14; Lee 2015,

- 202, fig. 7. 2; Osada 2019, n. 82(2)fig. 13. (4) Agrigento 4688 (bell-krater): Froning 1971, 97, 109, 114, pl. 16; Van Straten 1995, V127, fig. 30; Gebauer 2002, 217–219, 248–251, 253, 482, 498, 504, 532, A3, fig. 113; Carpenter 2007, 409f., fig. 26. 8. これらのうち(3)のFerraraの作例は、*kanephoros*の少女に導かれる行列図を表している。右記のポストンの作例は、*kanephoros*と一人の青年の組み合わせを表している。Museum of Fine Art 13.195: Van Straten 1995, V74, fig. 17; Gebauer 2002, 69–71, 185, 188, P28, fig. 27.
- (23) Neils 2001, 169–171. Frankfurt am Mein, Museum für Vor- und Frühgeschichte VF b 413 (bell-krater): ARV2 1115, 31bis; Van Straten 1995, 119, 127, 163, 226, V178, fig. 126; Neils 2001, 171, fig. 130; Gebauer 2002, B26, 383–387, 436, 441f., 482, 505, 524, 533, 543, fig. 251.
- (24) Clairmont 1989, esp. 495f.; Fehr 2011, 104, n. 421. パルテノン・フリーズにおける性差表現についてはYounger 1997, 120–153を参照。
- (25) Edelmann 1999, 37–41; Roccas 2000.
- (26) Edelmann 1999, 39.
- (27) Edelmann 1999, 38; Lawton 2007, 50.
- (28) Harrison 1996, 203; Stewart 1997, esp. 128; Hurwit 1999, 203f.; Lawton 2007, 50.
- (29) Edelmann 1999, 38.
- (30) 古代ギリシア社会における裸体の問題とその美術表現に関する文献は多いが、最も標準的な記述として Bonfante 1989; Stewart 1997, esp. 24–42を挙げられよう。近年では Osborne 2011; Clarke 2014; Stansbury-O'Donnell 2014; Lee 2015; Junker / Tauchert 2015を参照。陶器画におけるエロティックな主題一般については Bonfante 1989, 559, 561; Lissarrague 1990; Sutton Jr. 1992; Osborne 1996を参照。
- (31) Stewart 1997, 14–18, esp.41; Sutton Jr. 1992, esp. 5; Cohen 1997, 66–92.
- (32) Sutton Jr. 1992; Stewart 1997, 156–181; Kurke 1999.
- (33) Stewart 1995; Stewart 1997, 156–181が詳しい。Osborne 1996; Cohen 1997; Stewart 1996; Mangold 2000, 34–62も参照。
- (34) Brauronの聖域については Kahil 1983; Parker 2005, 228–248を参照。競技については Parker 2005, esp. 235–238; Stewart 1997, 29–31, 33f.; Scanlon 2002, 139–198; Fisher 2014; Kyle 2014を参照。
- (35) Kahil 1983, esp. 235–238; Stewart 1997, 30f., 34; Scanlon 2002, 139–174.
- (36) Sutton Jr. 1992, 3–35, esp. 21–24; Stewart 1997, esp. 120f.
- (37) アクロポリス出土の、あるアッティカの*pinakes*は家内の情景を表し、働く女性とその後ろに座る裸体の少女を描く。Athens, Acropolis Museum 2525: Karoglou 2010, 73, kat. 26, fig. 91; Avramidou 2015, fig. 2.
- (38) Neils 2003, 157, 159は、奉納浮彫においては、女性の衣の丈は男性のそのように踝ではなく地面に触れる長さになっていることを根拠に、E35を少年と見なす。この論拠は、言及されることは少ないが、筆者は説得的と考える。
- (39) New York, Metropolitan Museum of Art, Fletcher Fund 27.45: Ridgway 1970, 46, fig. 66; Jenkins 1994, 35, fig. 17; Lee 2015, 103f., fig. 4. 8; Walter-Karydi 2015, 290, fig. 176.
- (40) 墓碑における少年と少女の髪型と衣装は、成人男女のそれらと一致するとされる。Räuchle 2017, 166. なお、E35の短髪は、必ずしも少年を示唆する証拠にはならない。例えば、Pitsas出土の*pinakes*では、少女の*kanephoros*が短髪で表されている。Roccas 1995, 652は、儀式場面において少女が短髪で表現されることに言及している。
- (41) Grossman 2007, 314.
- (42) Sourvinou-Inwood 1988, 33–39, esp. 37.
- (43) Sourvinou-Inwood 1988, 84, n. 150. 比率の他に、彼女は他の年齢表現についても言及する。すなわち、身長、胸の膨らみ、側面観の身体の膨らみ (the convex profile of the torso)、顔、四肢、身体の高さである。墓碑に登場する子供の身長その他の年齢を示す指標については、Rühfel 1984; Roccas 2000; Grossman 2007, Lawton 2007; Räuchle 2017, 166–169も参照。なおDillon 2002, 47は、E35を思春期前の少女と見なす。
- (44) Lee 2015, 104.
- (45) Younger 1997, 142 n. 25も参照。なおPalagia 2008は、E35を少女と見なし、身体を覆い隠すキトンが色彩によって描かれていたと解釈する。ただし、少女の肌にも周囲の浮彫地にも浮彫にはそうした痕跡は残らないため蓋然性は低い。Vlassopoulou 2008も参照。
- (46) Lokris出土のポイオティア墓碑。Thebes Museum: Jenkins 1994, 35, fig. 18.
- (47) Connelly 2014, 171.
- (48) Athens, Acropolis Museum 2298: Van Straten 1995, 197, V19, fig. 3; Gebauer 2002, 80, 168, 192, 478f., 524, 534, P40, fig. 39; Borgers 2008, 93, n. 14; Osada 2019, n. 81(7). 国家祭礼において、籠持ちは上流階級の娘たちによって演じられたことが文献から判明している。FHG 328 F8; quoted by Harpokr. Suda, Phot. Lexikon s. v. kanephoroi; Deubner 1969, 12; Parke 1977, 141–143; Burkert 1985, 56; Simon 1983, 39–43, 66–68; Jenkins 1994, 35–40, 79, esp. 35; Roccas 1995; Neils 2001, 168; Shear 2001, 130–132, 759; Dillon 2002, 37–42. Dillon 2002, 38は、男性の青年がこの役割を務める描写を含む作例は、女性たちが参加しなかった私的な儀式を表現していたと見なす。

- (49) 註 22(3)を参照。
- (50) London, British Museum E 494: ARV2 1079, 3;1682; Add2 326; Van Straten 1995, 118, 127, 261, V367, fig. 124; Gebauer 2002, 397f., 437f., 494f., 522, 533, 537, B35, fig. 259.
- (51) Van Straten 1995, 60f.; Edelmann 1999, 146f.; Hamlington 2009. *kistephoros* は、家族と思しき一群を崇拜者として表現する4世紀の作例にしばしば表される。ただし、犠牲獣を牽く少年と女性の*kistephoros*は、必ずしも一対で登場するのではなく、それぞれ単独の場合もありうる。
- (52) Edelmann 1999, 144f. Van Straten 1995, 60, 64も参照。
- (53) Dillon 2002, 47.
- (54) The Eleusinia, Proerosia: IG II/III2 467 z. 10f.; 471 z. 9–11. The Hephaisteia: IG I3 82. Parke 1977, 74, 171; Edelmann 1999, 145; Polinskaya 2003, 101; Larson 2007, 160.
- (55) Pillar base, CEG 317 = IG I3 953 and SEG 46 [1996] 2374. アテナイ Eleusinion 近郊出土: Day 2016, 209.

図版典拠

- 図1: T. Kaneko; © Parthenon Project Japan.
 図2: T. Kaneko; © Parthenon Project Japan.
 図3: T. Kaneko; © Parthenon Project Japan.
 図4: T. Kaneko; © Parthenon Project Japan.
 図5: Wikimedia Commons, the free media repository
 (public domain: https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bruron_-_Votive_Relief2.jpg).
 図6: Osada 2019, fig. 18.
 図7: Photo, Museum (public domain: <https://images.metmuseum.org/CRDImages/gr/original/DT279.jpg>).

※この論文は文部科学省科学研究費 Parthenon Project Japan 2018-2021 (Grant Number JP18H03566) による研究成果の一部である。

(おさだ としひろ)